

展開中の過去の事態を表現する半過去記号素

— 無標の過去時制記号素と分割相 —

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されることがある。展開中という概念は、分割相に対応する。たとえば (1) の *il dormait déjà* という事態は、*elle se pencha, embrassa ...* という事態が生起した過去の時点において展開中の事態として、提示されている。

(1) *Elle se pencha, embrassa sa joue. Il dormait déjà.* (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.27)

(2) *Quelques heures plus tard, nous arrivions à Bordeaux.* (Marc Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p.287)

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されていないこともある。つまり、事態が分割相によって表現されないこともある。たとえば (2) の *..., nous arrivions ...* は、*quelques heures plus tard* で示された過去の時点で展開中の事態として、提示されているとは言えない。

* 福岡大学人文学部教授

したがって、半過去記号素は、展開中の事態を提示するための表意単位ではない。本稿では、とくにこのことを示す。半過去記号素にとって、事態が展開中であるのか展開中ではないのかの弁別は、非本質的な単なる解釈にすぎない。半過去記号素の実現形を用いて表現された事態は、実際、(1)の *il dormait déjà* のように過去のある時点において展開中であることもあれば、(2)の *... nous arrivions ...* のように展開中ではないこともある。

半過去記号素は、アスペクトを表すための表意単位ではなく、無標の過去時制記号素である。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない。つまり半過去記号素は、過去時制記号素（半過去記号素および単純過去記号素）の機能的な共通部分のみを備えた表意単位である。

2. 半過去記号素と呼ばれる無標の過去時制記号素

2.1 表意単位の実現形としての認定

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片が単なる音素の実現形ではないことを前提に、それを他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的かつ離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を意味する。

条件 (a) その切片は、音素(分節的な最小の弁別単位)の実現形ではない。

条件 (b) 発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。

条件 (c) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。

言い換えれば、発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、少なくとも上の条件 (a), (b) および (c) がみたされることが必要である。たとえば、(3) の *musicien* や (4) の *mécano* が音素の実現形でないことは自明である。つまり、これらの切片は条件 (a) をみたす。また (3) および (4) では、*musicien* と *mécano* を入れ換えることができる。つまり (3) の *musicien* や (4) の *mécano* は、条件 (b) をみたす¹。また *musicien* と *mécano* の入れ換えによって、(3) や (4) の意味に客観的かつ離散的な弁別が生じる。つまり (3) の *musicien* や (4) の *mécano* は、条件 (c) をみたす。したがって *musicien* と *mécano* はそれぞれ、少なくとも *vous êtes ...?* という文脈において、表意単位の実現形であるための必要条件をみたしていると考えてよい²。

(3) *Vous êtes musicien ?* (Brigitte Aubert, *Descentes d'organes*,
Collection Points, 2001, p.142)

(4) *Vous êtes mécano ?* (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*,
Collection Pocket, 2009, p.199)

最小の表意単位は、記号素と呼ばれる。記号素は、それ以上小さな表意単位に分節することができない表意単位である³。つまり記号素の実現形の内部において条件 (a), (b), (c) をみたす切片は、その記号素の実現形全体だけである。たとえば (3) や (4) における *vous* の内部にある切片のなかで、これらの3条件をみたしうる切片は、この *vous* の全体しかない。よって (3) や (4) における *vous* は、記号素の実現形とみなしてよい。

¹ 表意単位の実現形は、知覚可能な切片として抽出できるとはかぎらない。たとえば *au* には、前置詞記号素の実現形としての切片と定冠詞記号素の実現形としての切片が含まれる。これらの切片それぞれには、知覚可能な形がない。

² 表意単位を厳密に抽出するためには、おそらく「当該の切片を除いた発話の他の部分が表意単位の実現形である」という条件が必要である。

³ 非最小の表意単位は、連辞と呼ばれる。つまり連辞は、複数の記号素の複合体である。なお最小の表意単位は、形態素とも呼ばれる。

2.2 半過去記号素と単純過去記号素の存在

2.2.1 半過去記号素の存在

半過去の動詞形には、現在形の動詞には含まれない切片が含まれる。たとえば（５）の *aimait* には、（６）の *aime* には含まれない切片が含まれる。（５）の *aimait* は、半過去の動詞形である。（６）の *aime* は、現在形の動詞である。

（５）Il *aimait* la vitesse. (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.271)

（６）Il *aime* bien la confiture. (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.117)

半過去の動詞形に含まれ、かつ現在形の動詞には含まれない切片は、記号素の実現形としての必要条件をみだす。すなわち半過去の動詞形を特徴づける切片は、音素の実現形でもなければ音素の実現形の単なる連続でもない。また（５）の *aimait* と（６）の *aime* にみられるように、ほかの切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって、知的意味にもとづく弁別が発話に生じる（2.1を参照）。この切片は、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片である。よって、記号素の実現形とみなしてよい。

したがって、半過去の動詞形には、半過去記号素の実現形が含まれると考えてよい。半過去記号素という用語は、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位を指す。たとえば（５）の *aimait* には、半過去記号素の実現形が含まれることになる。「半過去記号素」と「半過去の動詞形」は、まったくの別物である。

2.2.2 単純過去記号素の存在

単純過去の動詞形には、現在形の動詞には含まれない切片が含まれる。たとえば（７）の *arriva* には、（８）の *arrive* には含まれない切片が含まれる。（７）の *arriva* は、単純過去の動詞形である。（８）の *arrive* は、現在形の動詞である。

(7) Le vendredi matin, elle *arriva* à 11 heures ! (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.244)

(8) La lave ! Elle *arrive*... (Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.106)

単純過去の動詞形に含まれ、かつ現在形の動詞には含まれない切片は、記号素の実現形としての必要条件をみだす。すなわち単純過去の動詞形を特徴づける切片は、音素の実現形でもなければ音素の実現形の単なる連続でもない。また(7)の *arriva* と(8)の *arrive* にみられるように、ほかの切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって、知的意味にもとづく弁別が発話に生じる(2.1を参照)。この切片は、単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片である。よって、記号素の実現形とみなしてよい。

したがって、単純過去の動詞形には、単純過去記号素の実現形が含まれると考えられる。単純過去記号素という用語は、単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位を指す。たとえば(7)の *arriva* には、単純過去記号素の実現形が含まれることになる。「単純過去記号素」と「単純過去の動詞形」は、まったくの別物である。

2.3 過去時制記号素として機能する半過去記号素と単純過去記号素

2.3.1 過去時制記号素として機能する半過去記号素

過去時間に位置づけられた事態について、その事態の過去性を表示するための記号素を過去時制記号素と呼ぶ。たとえば(9)の *faisait* には、過去時制記号素の実現形が含まれると言ってよい。この *faisait* という動詞形が、il *faisait froid* という事態が過去時間に位置づけられていることを示しているからである。

(9) Il *faisait froid*. (Georges Simenon, *La maison des sept jeunes filles*, Collection Folio, 1945/1954, p.81)

(10) Il *fait* froid, pas vrai ? (Maxime Chattam, *Le 5^e règne*, Collection Pocket, 2003, p.285)

半過去の動詞形を特徴づける最小の切片は、半過去記号素の実現形である。つまり半過去の動詞形に含まれ、かつ現在形の動詞には含まれない切片は、半過去記号素の実現形だと考えてよい (2.2.1 を参照)。たとえば (9) の *faisait* に含まれるが (10) の *fait* には含まれない切片は、半過去記号素の実現形である。

したがって、半過去記号素は、過去時制記号素だと考えられる。半過去記号素の実現形の存在は、事態の過去性を表示するからである。実際 (9) の *il faisait ...* に含まれる半過去記号素の実現形は、(10) の *il fait ...* と比較すれば明らかであるように、この事態が過去時間に位置づけられていることを表示している。

2.3.2 過去時制記号素として機能する単純過去記号素

過去時間に位置づけられた事態について、その事態の過去性を表示するための記号素を過去時制記号素と呼ぶ。たとえば (11) の *approcha* には、過去時制記号素の実現形が含まれると考えられる。この *approcha* という動詞形が、*il s'approcha ...* という事態が過去時間に位置づけられていることを示しているからである。

(11) Il *s'approcha* en courant. (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.147)

(12) Il *s'approche* de moi. (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.20)

単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片は、単純過去記号素の実現形である。つまり単純過去の動詞形に含まれ、かつ現在形の動詞には含まれない切片は、単純過去記号素の実現形だと考えてよい (2.2.2 を参照)。たとえば (11) の *approcha* に含まれるが (12) の *approche* には含まれない切片は、単純過

去記号素の実現形である。

したがって、単純過去記号素は、過去時制記号素だと言ってよい。単純過去記号素の実現形の存在は、事態の過去性を表示するからである。実際 (11) の *il s'approcha ...* に含まれる単純過去記号素の実現形は、(12) の *il s'approche ...* と比較すれば明らかであるように、この事態が過去時間に位置づけられていることを表示している。

2.4 有標の過去時制記号素と無標の過去時制記号素

2.4.1 有標の項と無標の項

複数の言語単位が、機能的な共通部分を共有することがある。言語単位としては、主として、弁別単位や表意単位がある。たとえば *chaton*（仔猫）を実現形とする表意単位と *chat*（猫）を実現形とする表意単位には、表意機能の側面において「猫」という共通部分がある。

機能的共通部分を共有する複数の言語単位のなかで、機能的な非共通部分を備えたものを「有標の項」と呼ぶ。「有標」という用語は、標識の存在を意味する。「標識」という概念は、機能における「共通部分以外の部分」つまり機能的な非共通部分に対応する。たとえば *chaton* を実現形とする表意単位は、*chaton* と *chat* を実現形とする表意単位の機能的共通部分である「猫」概念に加えて、「仔」という機能的な非共通部分も備えている。つまり *chaton* を実現形とする表意単位は、*chat* を実現形とする表意単位との関係において、有標の項だと考えられる。有標の項は、いわば「機能的共通部分 + 機能的非共通部分」ということになる。

一方、機能的共通部分を共有する複数の言語単位のなかで、機能的な非共通部分を備えていないものを「無標の項」と呼ぶ。「無標」という用語は、標識つまり機能的非共通部分の不在を意味する。つまり無標の項は、機能的共通部分しか備えていない言語単位である。たとえば *chat* を実現形とする表意単位

は、*chaton* を実現形とする表意単位との関係において、無標の項だと考えられる。ようするに無標の項は「機能的な共通部分」そのものにほかならない。

2.4.2 有標の過去時制記号素として機能する単純過去記号素

単純過去記号素は、半過去記号素と同様に、過去時制記号素である。単純過去記号素の実現形を用いて表現した事態は、過去時間に位置づけられることになる (2.3.2 を参照)。たとえば (13) の ... *Sean les regarda* ... は、これが現実世界の事態であるか物語世界の事態であるかはともかくとしても、少なくとも現在時間や未来時間に位置づけられた事態ではありえない。単純過去記号素の使用は、その意味で、事態の過去時間への位置づけと常に結びついている。

(13) Puis *Sean les regarda* un par un. (Maxime Chattam, *Le 5^e règne*, Collection Pocket, 2003, p.387)

(14) *Tristan regarde* la télé. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.260)

単純過去記号素は、過去時制記号素であるだけでなく、事態の完了を明示する表意単位でもある。実際 (13) の ... *Sean les regarda* ... を、未完了の事態として解釈することはできない。(14) の *Tristan regarde* ... には、未完了の事態としての解釈がありうる (これから見る、見ている最中だ、などの解釈)。しかし (13) の ... *Sean les regarda* ... には、その可能性がない。そこに単純過去記号素の実現形が含まれているからである。単純過去記号素の使用は、事態の完了と常に結びついている。

したがって単純過去記号素は、半過去記号素との関係において、有標の過去時制記号素であると考えられる。単純過去記号素は、過去時制記号素であることを半過去記号素と共有する (2.3.1 と 2.3.2 を参照)。単純過去記号素は、事態の完了を明示する表意単位でもある。単純過去記号素は、完了アスペクトを含意した有標の過去時制記号素なのである (2.4.1 を参照)。

2.4.3 無標の過去時制記号素として機能する半過去記号素

半過去記号素は、単純過去記号素と同様に、過去時制記号素である。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない（2.3.1を参照）。たとえば（15）の *il venait ...* における半過去記号素の実現形は、（16）の *..., il vient ...* の場合と比較すれば明らかであるように、この事態が過去時間に位置づけられていることを示している。

(15) Il *venait* ici une fois par semaine depuis trois ans. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.142)

(16) Chaque soir, il *vient* à Beylerbeyi pour surveiller ses papavéracées... (Jean-Christophe Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.514)

(17) Je n'*arrivais* pas à dormir, [...].(Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.109)

(18) Je n'*arrive* pas à dormir. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.380)

半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることしかしない表意単位でもある。たとえば、半過去記号素の実現形を用いた（15）の *il venait ...* は「過去時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。これにたいして、現在形の動詞を用いた（16）の *..., il vient ...* は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。これらの解釈の間には、事態の時間的な位置づけが過去時間にあるのか現在時間にあるのかという違いしかみられない。実際、（15）から半過去記号素の実現形を除去した *il vient ici une fois par semaine ...* は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈してよい。つまり（15）における半過去記号素の存在理由は、*il vient ici une fois par semaine ...* という事態を過去時間に位置づ

けることであって、それ以上でも以下でもない。この点は (17) の *je n'arrivais pas ...* における半過去記号素の使用についても、同様である。(17)の *je n'arrivais pas ...* は「過去時間における状態」として解釈することができる。一方 (18) の *je n'arrive pas ...* は「現在時間における状態」として解釈することができる。これらの解釈の間にある相違は、事態の時間的な位置づけが過去時間にあるのか現在時間にあるのかという違い以上のものでもなければ、それ以下のものでもない。ようするに半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることしかしない、純粋な過去時制記号素である。

したがって半過去記号素は、単純過去記号素との関係において、無標の過去時制記号素であると考えられる。半過去記号素は、過去時制記号素であることを単純過去記号素と共有する (2.3.1 と 2.3.2 を参照)。半過去記号素は、また、事態を過去時間に位置づけることしかしない過去時制記号素でもある⁴。言い換えれば、半過去記号素は、半過去記号素と単純過去記号素の共通部分しか表現しない表意単位である。ようするに半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることに特化した無標の過去時制記号素なのである (2.4.1 を参照)。

3. 半過去記号素と展開中の過去の事態

3.1 展開中の事態と非展開中の事態

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されることがある。展開中という概念は、分割相に対応する。たとえば (19) の *je me promenais* という事態は、*j'ai entendu un cri* や *j'ai eu peur* という事態が生起した過去の時点において展開中の事

⁴ 半過去記号素が無標の過去時制記号素であることについては、参考文献として示した諸論考を参照。

態として、提示されている。同様に (20) の *je m'eclipsais* は、*Fernstein me rappela* が生じた過去の時点において展開中の事態として、提示されている。

(19) *Je me promenais. J'ai entendu un cri, j'ai eu peur.* (Fred Vargas, *Un peu plus loin sur la droite*, Collection J'ai lu, 1996, p.213)

(20) *Fernstein me rappela* alors que *je m'eclipsais*. (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.142)

(21) *Cinq minutes après*, les trois autres *arrivaient*. (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.300)

(22) *Environ cinq mois plus tard*, elle se *mariait* à Marseille, [...]. (Sébastien Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.312)

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されていないこともある。たとえば (21) の *les trois autres arrivaient* は、*cinq minutes après* で示された過去の時点で展開中の事態として、提示されているとは言えない。同じく (22) の *elle se mariait à Marseille* は、*environ cinq mois plus tard* によって示された過去の時点で展開中の事態として、提示されているわけではない。

したがって半過去記号素にとって、事態が展開中であるのか展開中ではないのかの弁別は、非本質的な単なる解釈にすぎない。半過去記号素の実現形を用いて表現された事態は、(19) の *je me promenais* のように過去のある時点において展開中であることもあれば、(21) の *les trois autres arrivaient* のように展開中ではないこともある。無標の過去時制記号素である半過去記号素には、事態が展開中であるのか非展開中であるのかという弁別は含意されていない (2.4.3 を参照)。

3.2 展開中の事態と事態の開始, 事態の非完了

3.2.1 展開中の事態と事態の開始

事態を展開中のものとして提示するためには, 少なくとも, その事態をすでに開始した事態として提示する必要がある. たとえば (23) において *les portes du train se fermaient* という事態は, 展開中の事態として提示されている. (23) の *les portes du train se fermaient* が展開中の事態として提示されるためには, この事態が, *il arriva sur le quai* の生起時点においてすでに開始している事態として, 提示されることが必要である.

(23) *Les portes du train se fermaient* quand il *arriva* sur le quai. (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.152)

(24) [...], Ivory jeta un nouveau coup d'œil à la pendule au dessus du bar ; le vol d'Amsterdam *décollait* dans quarante-cinq minutes, [...]. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.309)

というのも, まだ開始していない事態は, 展開中の事態ではありえないからである. たとえば(24)において, *le vol d'Amsterdam décollait ...* という事態を, 展開中の事態として解釈することはできない. この事態は, まだ開始していない事態として提示されているからである.

半過去記号素の実現形の使用は, 事態を展開中のものとして提示することの妨げにならない. 実際, 半過去記号素の実現形を含んだ (23) の *les portes du train se fermaient* は, 展開中の事態として提示されている. 無標の過去時制記号素である半過去記号素には, 事態が開始しているのか開始していないのかという弁別は含意されていない (2.4.3 を参照). 半過去記号素の実現形を用いて表現された事態は, (23) の *les portes du train se fermaient* のように開始していることもあれば, (24) の *le vol d'Amsterdam décollait ...* のように開始していないこともある.

3.2.2 展開中の事態と事態の非完了

事態を展開中のものとして提示するためには、少なくとも、その事態を完了していない事態として提示する必要がある。たとえば (25) において、*il fixait la nappe* という事態は展開中の事態として提示されている。(25) の *il fixait la nappe* が展開中の事態として提示されるためには、この事態が、*il ne répondit rien* という事態の生起時点において完了していない事態として、提示される必要がある。

(25) *Il ne répondit rien. Il fixait la nappe.* (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.94)

(26) *Au bout de cinq mois, on se mariait* civilement. (*Elle*, 7 mars 2005, p.90)

というのも、すでに完了した事態は、展開中の事態ではありえないからである。たとえば (26) において、*on se mariait ...* という事態を、展開中の事態として解釈することはできない。この事態は、すでに完了した事態として提示されているからである。

半過去記号素の実現形の使用は、事態を展開中のものとして提示することの妨げにならない。実際、半過去記号素の実現形を含んだ (25) の *il fixait la nappe* は、展開中の事態として提示されている。無標の過去時制記号素である半過去記号素には、事態が完了しているのか完了していないのかという弁別は含意されていない (2.4.3 を参照)。半過去記号素の実現形を用いて表現された事態は、(25) の *il fixait la nappe* のように完了していないこともあれば、(26) の *on se mariait ...* のように完了していることもある。

3.3 事態の開始および非完了を判定するための基準となる時点の必要性

3.3.1 事態の開始を判定するための基準となる時点の必要性

ある事態をすでに開始した事態として提示するためには、少なくとも、その

事態が開始していることの判定基準となる時点が必要である。どの時点においてのことであるかという基準の時点がないかぎり、当該の事態がすでに開始しているのか開始していないのかを明確に表現することはできない。ある事態が開始しているのか開始していないのかは、それがどの時点においてのことなのかという基準時点の設定によるからである。たとえば (27) の *Simon parlait ...* を開始している事態として明確に提示するためには、*elle se déshabilla ...* という事態の生起時点のような、何らかの基準時点の設定が必要である。

(27) *Elle se déshabilla très vite. Simon parlait de l'orchestre. (Françoise Sagan, Aimez-vous Brahms..., Collection Pocket, 1959, pp.108-109)*

よって、ある事態を展開中の事態として提示するためには、少なくとも、その事態が開始していることの判定基準となる時点が必要である。事態を展開中のものとして提示するためには、少なくとも、その事態をすでに開始した事態として提示する必要があるからである (3.2.1 を参照)。そして、事態をすでに開始した事態として提示するためには、上に述べたように、その事態が開始していることの判定基準となる時点の設定が必要である。たとえば (27) において *Simon parlait ...* を展開中の事態として提示するためには、*elle se déshabilla ...* の生起時点のような、何らかの基準時点の設定が必要である。

(28) *Autrefois ses provocations faisaient sourire ; maintenant elles font de la peine. (Frédéric Beigbeder, 99 francs (14,99 euros), Collection Folio, 2000, p.138)*

そのような基準時点の設定がなければ、事態を展開中のものとして提示することはできない。実際 (28) の *... ses provocations faisaient sourire* は、展開中の事態として提示されているわけではない。この *... ses provocations faisaient sourire* は、半過去記号素（無標の過去時制記号素）の実現形を用いて、過去時間に位置づけられた事態として提示されているだけなのである (2.4.3 を参照)。

3.3.2 事態の非完了を判定するための基準となる時点の必要性

ある事態を完了していない事態として提示するためには、少なくとも、その事態が完了していないことの判定基準となる時点が必要である。どの時点においてのことであるかという基準の時点がないかぎり、当該の事態がすでに完了しているのか完了していないのかを明確に表現することはできない。事態が完了しているのか完了していないのかは、それがどの時点においてのことなのかという基準時点の設定によるからである。たとえば (29) の *les enfants dormaient* を完了していない事態として明確に提示するためには、*Mathias lui suggéra ...* という事態の生起時点のような、何らかの基準時点の設定が必要である。

(29) *Mathias lui suggéra de parler moins fort, les enfants dormaient.*

(Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.117)

よって、ある事態を展開中の事態として提示するためには、少なくとも、その事態が完了していないことの判定基準となる時点が必要である。事態を展開中のものとして提示するためには、少なくとも、その事態を完了していない事態として提示する必要があるからである (3.2.2 を参照)。そして、事態を完了していない事態として提示するためには、上に述べたように、その事態が完了していないことの判定基準となる時点の設定が必要である。たとえば (29) において *les enfants dormaient* を展開中の事態として提示するためには、*Mathias lui suggéra ...* の生起時点のような、何らかの基準時点の設定が必要である。

(30) *Le tueur faisait ses bagages, il quittait la ville, probablement la région.* (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.585)

そのような基準時点の設定がなければ、事態を展開中のものとして提示することはできない。実際 (30) の *le tueur faisait ses bagages* や *il quittait la*

ville, ... は、展開中の事態として提示されているわけではない。この *le tueur faisait ses bagages* や *il quittait la ville, ...* は、半過去記号素（無標の過去時制記号素）の実現形を用いて、過去時間に位置づけられた事態として提示されているだけなのである（2.4.3 を参照）。

3.3.3 基準時点の設定における半過去記号素の非関与性

事態を展開中のものとして提示するためには、少なくとも、それがどの時点のことであるのかという基準時点の設定が必要である。より具体的には、その事態が開始していることの判定基準となる時点が必要である（3.3.1 を参照）。また、その事態が完了していないことの判定基準となる時点が必要である（3.3.2 を参照）。たとえば（31）の *il pleurait* という事態は、展開中の事態として提示されている。そのためには、*mon père m'a regardée...* の生起時点のような、*il pleurait* が開始している事態であることを判定するための基準時点が必要である。同時に、*mon père m'a regardée...* の生起時点のような、*il pleurait* が完了していない事態であることを判定するための基準時点も必要である。

(31) *Mon père m'a regardée curieusement : il pleurait, je crois bien.*
(Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.144)

(32) *Avant il me souriait !* (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*,
Collection Le Livre de Poche, 1994, p.84)

展開中の事態の表現における半過去記号素の実現形の使用は、このような基準時点の設定に関与しない。半過去記号素の実現形の使用は、基準時点の存在を前提にしないからである（3.3.1 と 3.3.2 を参照）。半過去記号素の実現形の使用は、実際、（31）の *il pleurait* のように何らかの基準時点（*mon père m'a regardée...* の生起時点）の設定をとまなうことがある。また（32）の ... *il souriait* のように、基準時点の設定をとまなわないこともある。つまり半過去

記号素の実現形の存在は、ある事態がどの時点で展開中であるのかという基準時点の有無に関与しない。基準時点の設定は、そもそも、半過去記号素の実現形を含む動詞形の外部にしかありえない。

したがって半過去記号素は、展開中の事態を提示するための表意単位ではありえない。半過去記号素は、事態を展開中のものとして提示するための基準時点の設定にたいして、非関与的である。実際、半過去記号素の実現形を用いて表現した事態は、展開中であることもあれば展開中ではないこともある（3.1を参照）。無標の過去時制記号素である半過去記号素には、それが表現する事態が展開中であるのか非展開中であるのかという弁別は、含意されていない（2.4.3を参照）。

4. まとめ

半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることに特化した、無標の過去時制記号素である。半過去記号素という用語は、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする時制記号素を指す。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない。つまり半過去記号素は、過去時制記号素（半過去記号素および単純過去記号素）の機能的な共通部分のみを備えた表意単位である。

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されることがある。展開中という概念は、分割相に対応する。たとえば (33) の *il faisait frais* という事態は、*Juliette frissonna* という事態が生起した過去の時点において展開中の事態として、提示されている。

(33) *Juliette frissonna. Il faisait frais.* (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.45)

(34) *Cinq minutes plus tard nous entrons* dans une bâtisse en brique

rouge. (Tonino Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999, p.98)

半過去記号素の実現形を使って表現された事態は、過去のある時点において展開中の事態として、提示されてはいないこともある。つまり、事態が分割相によって表現されないこともある。たとえば (34) の ... nous entrions ... は, cinq minutes plus tard で示された過去の時点で展開中の事態として、提示されているとは言えない。

事態を展開中のものとして提示するためには、少なくとも、それがどの時点のことであるのかという基準時点の設定が必要である。より具体的には、その事態が開始していることの判定基準となる時点が必要である。また、その事態が完了していないことの判定基準となる時点も必要である。たとえば (33) の il faisait frais が展開中の事態として提示されるためには、Juliette frissonna の生起時点のような、il faisait frais が開始してはいるが完了はしていない事態であることを判定するための基準となる時点の設定が必要である。

しかし、展開中の事態の表現における半過去記号素の実現形の使用は、このような基準時点の設定に関与しない。半過去記号素の実現形の使用は、何らかの基準時点の設定をともなうこともあれば、それをともなわないこともある。基準時点の設定は、そもそも、半過去記号素の実現形を含む動詞形の外部にしかありえない。

したがって、半過去記号素は、展開中の事態を提示するための表意単位ではない。半過去記号素の実現形を用いて表現された事態は、過去のある時点において展開中であることもあれば、展開中ではないこともある。半過去記号素にとって、事態が展開中であるのか展開中ではないのかの弁別は、非本質的な単なる解釈にすぎない。無標の過去時制記号素である半過去記号素には、事態が展開中であるのか非展開中であるのかという弁別は含意されていない。

参考文献

- 川島浩一郎（2006）「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察 — 時制とアスペクトの間接的対立 —」『福岡大学研究部論集』A6-3, 37-61.
- 川島浩一郎（2012a）「半過去と未完了解釈 — 完了か未完了かの弁別を含意しない過去時制 —」『福岡大学人文論叢』43-4, 817-833.
- 川島浩一郎（2012b）「過去時制と非現実解釈」『ふらんぼー』37, 東京外国語大学フランス語研究室, 17-35.
- 川島浩一郎（2012c）「時間的な対比を表す半過去について」『福岡大学研究部論集』A12-2, 9-13.
- 川島浩一郎（2013a）「非動詞化記号素における対立」『ふらんぼー』38, 東京外国語大学フランス語研究室, 13-30.
- 川島浩一郎（2013b）「半過去と非現実の帰結 — 間一髪半過去をめぐって —」『福岡大学研究部論集』A13-1, 25-31.
- 川島浩一郎（2014a）「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」『福岡大学人文論叢』45-4, 521-541.
- 川島浩一郎（2014b）「複合過去と単純過去の対立の中和」『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, 45-65.
- 川島浩一郎（2014c）「教科書における無標の過去時制：半過去の教え方」『Rencontres』28, 関西フランス語教育研究会, 107-111.
- 川島浩一郎（2015a）「接続法半過去形および接続法大過去形における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学人文論叢』46-4, 899-923.
- 川島浩一郎（2015b）「複合過去と半過去の区別に関する一考察 — 現在時との関係の有無 —」『福岡大学人文論叢』47-1, 151-163.
- 川島浩一郎（2015c）「仮定を提示する Si 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 半過去記号素と原過去時制記号素 —」『福岡大学人文論叢』47-2, 497-519.
- 川島浩一郎（2015d）「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制的弁別とアスペクト的弁別 —」『福岡大学人文論叢』47-3, 787-812.
- 川島浩一郎（2016a）「Pendant que 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の

- 中和『福岡大学研究部論集』A16-1, 33-40.
- 川島浩一郎 (2016b) 「過去時制記号素との共起における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — ディスクールとイストワールの弁別と大過去形 —」『福岡大学人文論叢』48-1, 133-152.
- 川島浩一郎 (2016c) 「無標の過去時制記号素：半過去形の教授方針」『Rencontres』30, 関西フランス語教育研究会, 74-78.
- 川島浩一郎 (2016d) 「単純過去記号素との共起における完了アスペクト記号素の対立の中和 — 「ディスクール」と「イストワール」の弁別の外側にある原完了アスペクト記号素 —」『福岡大学人文論叢』48-2, 493-512.
- 川島浩一郎 (2017a) 「複合過去および半過去における点的解釈と線の解釈」『福岡大学教職課程教育センター紀要』創刊号, 33-44.
- 川島浩一郎 (2017b) 「仮定を表す Si 節における過去時制記号素」『福岡大学人文論叢』48-4, 1127-1144.
- 川島浩一郎 (2017c) 「無標の完了アスペクト形態素 — フランス語における複合過去形態素 —」『福岡大学教職課程教育センター紀要』2, 53-66.
- 川島浩一郎 (2017d) 「複合過去記号素および受動態記号素との共起における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 大過去形と前過去形における過去時制 —」『福岡大学研究部論集』A17-1, 67-81.
- 川島浩一郎 (2018) 「非現実の仮定が導く帰結の非現実性：教授法的観点における過去時制と非現実解釈」『Rencontres』32, 関西フランス語教育研究会, 75-79.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, CREDIF.
- TOURATIER, Christian (1998), « L'imparfait, temps du passé non marqué », *Cahiers Chronos* 2, 21-28.
- 渡瀬嘉朗 (1985) 「動詞の「時」と「相」」『フランス語学の諸問題』三修社, 38-49.
- 渡瀬嘉朗 (1990) 「「未完了」特性について」『東京外国語大学論集』41, 23-38.
- 渡瀬嘉朗 (1994) 「Actuel と Inactuel — 「現在」と「半過去」, 「大過去」 —」『東京外国語大学論集』48, 43-58.
- 渡瀬嘉朗 (1995) 「時制の理論のために — 文意の分析と時制の対立 —」『東京外国語大学論集』50, 35-50.
- 渡瀬嘉朗 (1998) 「二つの過去形 — 意味の枠組みの明確な過去, 枠組みのない過去 —」

『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』三修社, 8-21.

渡瀬嘉朗 (2012) 『統辞理論の周辺』三修社.

渡瀬嘉朗 (2013) 「時制とマルク」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題 IV』
三修社, 10-16.